第四三三回　五月二八日（火）

聖者イブラーヒーム伝説
――イスラーム世界から東南アジアへの拡大――

東洋文庫研究員
東京大学教授　佐藤次高

スルタン・イブラーヒーム・ブン・アドハム（七三〇頃―七七七／八年）は、初期イスラーム時代の高名な禁欲主義者（ザーヒド）・神秘主義者（スーフィー）としてよく知られている。アフガニスタンのバルフに生まれ、放浪と瞑想と異教徒との戦いの生活を送った後に、ビザンツ帝国との国境に近い地中海上の島、あるいは地中海岸の港町スール、ジャバラ、もしくはダマスクス、バグダードなどで没したと伝えられる。現在は、ラタキアの南やく三〇キロメートルにあるジャバラにイブラーヒームの墓とモスクがある。没後しばらくしてその聖者化がはじまり、一一世紀頃までに現在へと伝わる聖者伝説が成立した。

イブラーヒームに関するもっとも古い記録であるブハーリー（八七〇年没）の『大史』やブスティー（九六五年没）の『著名学者列伝』には、イブラーヒームがバルフ生まれのアラブ人であり、イラクへ移住した後、敬虔な信仰者・戦士としての生活を送ったことだけが記されている。しかし一一世紀になると、イブラーヒームがバルフの王侯の出であり（スルタンと呼ばれる所以）、狩りの途中で神の戒めの声を聞いて改心し、地位・財産・家族のすべてを捨てて放浪の旅に出る物語が登場する。この改心物語以外にも、労働によって糧を得るイブラーヒーム、山野をめぐって瞑想し、礼拝するイブラーヒーム、奇跡を起こすイブラーヒーム、名声や権力を嫌うイブラーヒーム、友情に篤いイブラーヒームなどさまざまな種類の伝説がつくり出された。

ジャバラがイブラーヒームの死没地として定着し、その墓所にモスクが建てられ、人々の参詣（ジヤーラ）の対象となるのは一二―一三世紀のことである。一三二六年にジャバラを訪れたイブン・バットゥータは、その旅行記に「毎年シャーバーン月半ばになると、シリアの各地からこの墓所をめざして多くの参詣者が集まる」と記している。神秘主義思想の拡大に伴って聖者イブラーヒームの伝説はトルコ世界にも伝わった。イズニクにカーディリーヤ教団の支部をつくったエシュレフオウル（一四六九年没）の著書『魂を清めるもの』には、権勢を誇ったイブラーヒームが、宮殿を訪れたラクダひきの諭しによって改心する物語が収められている。

いっぽう、パンジャブ地方のインド絵画を研究したA・

G・アーチャーによれば、グジャラート北方のプンチュには四人の天使にかしずかれる聖者イブラーヒームの絵（一七六〇年頃）が残されている。またR・ジョーンズは、一七世紀以降に登場するジャワ文字でつづられたマレー語のイブラーヒーム伝説を体系的に研究し、長短二種の伝説を英訳紹介している。それによれば、イラクの王であったイブラーヒームは、年老いた貧者（ファキール）から現世のはかないことを教えられ、すべてを捨てて放浪の旅に出る。途中、川上から流れてきたザクロの実を半分食べてしまったことを悔い、その持ち主を訪ねて許しを乞うが、正直で敬虔な性格を見込まれ、持ち主の娘との結婚を求められる。四〇日を共に過ごしたイブラーヒームは、やがて妻を残してメッカへと旅立ち、そこで禁欲と信仰三昧の生活を送ったという。

この物語はイブン・バットゥータの『旅行記』に記された「アドハム（イブラーヒームの父）の物語」と筋立ては同じである。現在のところ、イブラーヒーム伝説がどのような経緯で東南アジアに伝わったのかは不明であるが、私はアラブの神秘主義者あるいは商人がマレーシアにやって来てこれを伝えた可能性が高いと考えている。